

ジュニアスポーツ指導の現状とあり方

～競技間、子ども・指導者間、指導の目的の差に着目して～

野下 卓泰 (横浜国立大学)

1. 目的

本研究では、指導者と子どもの「指導認識の違い」を明らかにした上で、子どもの有能感への影響を調査し、ジュニアスポーツ指導の現状と今後のあり方を提案することを目的とした。

2. 方法

- 1) 対象者：スポーツチームに属する小学4、5、6年生95名、指導者37名（野球、陸上、ラグビー、サッカーの4種目で「野球・他競技」と表記する。）
- 2) 調査方法：「コーチの関わり方」（正のコーチングスキル因子、負のコーチングスキル因子、子ども同士の働きかけ因子）の質問紙調査
- 3) 分析方法：「コーチの関わり方」因子間の関係性（相関分析）、「コーチの関わり方」因子の属性間比較（対応のないt検定）

3. 結果と考察

(1) 「コーチの関わり方」因子間における相関関係

指導者・子ども共に正のコーチングスキル因子と子ども同士の働きかけ因子において有意な正の相関が見られた。山本ら¹⁾と同様に子どもがスポーツ活動していくうえで「正のコーチング」と「子ども同士の働きかけ」が高まることで子どもの有能感を育むことができると考えられる。

(2) 「コーチの関わり方」の競技間比較

指導者の「コーチの関わり方」の各因子に有意な差は示されなかった。子どもの「コーチの関わり方」では、正のコーチングスキル因子において他競技群が有意に高い値を示し、負のコーチングス

キル因子においては野球群が有意に高い値を示した（表1）。つまり、子どもにおいて競技間で「指導認識の違い」が存在すると考えられる。

表1 子ども「コーチの関わり方」競技間比較

「コーチの関わり方」	t検定（競技間）
正のコーチングスキル	野球<他競技
負のコーチングスキル	他競技<野球
子ども同士の働きかけ	有意差なし

(3) 「コーチの関わり方」の子ども・指導者間比較

負のコーチングスキル因子において指導者が有意に高い値を示した（表2）。つまり、指導者はコーチングに不安を持ち、指導している可能性が示唆された。子ども同士の働きかけ因子において子どもが有意に高い値を示した。指導者の把握以上に子ども同士で支え合っていると推察できる。

表2 「コーチの関わり方」子ども・指導者間比較

「コーチの関わり方」	t検定
正のコーチングスキル	有意差なし
負のコーチングスキル	子ども<指導者
子ども同士の働きかけ	指導者<子ども

4. 結論

本研究では、ジュニアスポーツ指導の現状として、属性間による「指導認識の違い」が存在していることが明らかになった。子どもの有能感を高める指導を行うために、子ども主体のコーチングが重要であると考えられる。

<参考文献>

- 1) 山本雄介、城後豊（2009）高等学校における運動部活動のコーチングに関する一考察：生徒の目的達成とコーチの関わり方に着目して 北海道教育大学紀要. 60(1): 215-226